九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

柘枝伝考

目加田，さくを

https://doi.org/10.15017/12317

出版情報：語文研究. 12, pp.13-22, 1961-04-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

柘枝伝考

目加田さくを

七世紀末、恐らく八世紀初頭に創作されたと想われる伝奇、柘枝伝について、ここでは考察をすすめる事とする。

万葉集（最新歌天平宝字三年七五九）巻三に

仙柘枝歌三首

霰零吉志美我高嶺乎険跡草取可奈和妹手乎取

右一首或云。吉野人味稲与二柘枝仙媛一歌也。但見二柘枝伝一無レ有二此歌一。

此暮柘之左枝乃流来者梁者不打而不取香聞将有

右一首

古爾梁打人乃無有世伐此間毛有益柘之枝羽裳

右一首若宮年魚麻呂作

とある題詞並に左註によって、少くとも万葉集左註成立以前に柘枝伝が存在した。即ち、見柘枝伝とある事によって考えれば、口伝ではなく、見られるもの、読まれる作品として記述された柘枝伝が既に存在していた事を知り得るのである。しかし明確な著作年月を推定する事は出来ない。只懐風藻、続日本紀に散見する関係部分と比較参照する事によって凡その年代を考察してみよう。懐風藻は天平勝宝三年（七五一）の撰であるが、柘枝伝関係の詩を九首、正確には六首蔵している。

①遊二吉野一其一　藤原朝臣史　六五九―七二〇（養老四）

飛レ文山水地　命レ爵薜蘿中　漆姫控レ鶴挙　柘媛接レ魚通

煙光巌上翠　日影秀前紅　翻知玄圃近　対翫入松風

②同　其二

夏身夏色古　秋津秋気新　昔者同汾后　今之見吉実

霊仙駕レ鶴去　星客乗レ査逡　清性担二流水一　素心開二静仁一

③従二駕吉野宮一応レ詔　其二　大伴王

山幽仁趣遠　川浄智懐深　欲レ訪二神仙迹一　追従吉野潯

。④遊二吉野川一　紀朝臣男人　六八二―七三八（天平十）

万丈崇巖削成秀　千尋素濤逆折流　欲レ訪二鐘池越潭跡一
留二連美稲逢槎洲一

⑤扈二従吉野宮一

鳳蓋停二南岳一　追尋智与レ仁　嘯レ谷将レ猻語　攀レ藤共レ鳥親
峯巖夏景変　泉石秋光新　此地仙霊宅　何須姑射倫

。⑥遊二吉野川一　藤原朝臣万里　六九五―七三七（天平九）

友非二干レ禄友一　賓是飡レ霞賓　縱歌臨二水智一
長嘯楽二山仁一　梁前柘吟古　峽上簧声新　琴□猶未極
明月照二河辺一　拓吟―拓歌

。⑦遊二吉野山一　丹墀真人広成―七三九（天平十一）

山水随臨賞　巖谿逐レ望新　朝看度レ峯翼　夕翫躍レ潭鱗
放曠多二幽趣一　超然少俗塵　栖二心佳野域一　尋二問美稲津一

。⑧吉野作

高嶺嵯峨多奇勢　長河渺漫作二廻流一　鐘池越潭豈凡類
美稲逢レ仙同二洛洲一

。⑨従二駕吉野宮一　高向朝臣諸足

在昔釣レ魚士　方今留レ鳳公　弾レ琴与レ仙戯　投レ江将レ神通
柘歌泛二寒渚一　霞景飄二秋風一　誰謂姑射嶺　駐蹕望二仙宮一

この外、

⑩神居深亦静　（従二駕吉野宮一、吉田宜）

⑪此地即方丈（誰説桃源賓）　（遊二吉野宮一、中臣人足）

就中六首（(1)(4)(6)(7)(8)(9)）は明確に、柘媛、柘歌、美稲の語を有しているから柘枝伝を契機として作詩されていると断言出来る。又(1)と同一作者の同題其二であり、(1)の控レ鶴挙が柘媛接レ魚通と関係ありとすれば、(2)の霊仙駕レ鶴去、も柘媛伝と関係あるものとなる。(3)の欲訪神仙迹、追従吉野尋はつまり(7)の尋二問美稲津一、或は(8)の美稲逢レ仙同二洛洲一　に近く(5)の此地仙霊宅、何須姑射倫は、(9)の誰レ謂姑射嶺　駐レ蹕望二仙宮一と甚だ近似性をもつ詩想である。この意味で(2)(3)(5)も柘枝伝を念頭において、霊山駕鶴、神仙迹、仙霊宅と詠じていると考えれば柘枝関係九首となる。(10)(11)は神居、方丈というのであるから只神仙の住居、史記の所謂海中三神山の一、方丈こそ此の吉野宮なりと伝奇的造形をするものが他に二首ある事となる。従って柘枝伝関係を六首に限っても、神仙関係が(2)(3)(5)(10)(11)の五首となるわけである。

さて、柘枝関係作詩の年月、即ち遊吉野、従駕吉野の正確な年月を知る事は不可能に近いのである。天武元年（六七三）以後、吉野行幸の記事を紀、続紀に求めるとほぼ左の如くである。

天武八年（六八〇）五月　幸二于吉野宮一
朱鳥三年（六八九）正月辛未天皇幸二吉野宮　甲戌天皇至レ自二吉野宮
四年（六九〇）二月甲子
五月戊寅

八月甲戌　〃
五年（六九一）正月辰丙　〃　未巳　天皇至レ自ニ吉野宮一
四月辰丙　〃　戊壬
十月己乙　〃
六年（六九二）五月子丙　辰庚　己丁　車駕還レ宮
十月酉癸
七年（六九三）五月丑己　未己　天皇至自吉野宮
七月午甲　卯癸　天皇至自吉野
八年（六九四）九月丑乙　己癸　車駕還宮
九年（六九五）二月戌丙　戊壬　天皇至自吉野
三月未乙　寅壬
六月午甲
八月亥乙　己己
十二月寅戊　戊丙
十年（六九六）二月亥乙　酉己
四月亥乙　五月己乙
六月子戊　甲丙
太宝元年（七〇一）六月　太上天皇幸吉野離宮
七月　車駕至自吉野離宮
天平八年（七三六）六月　行幸芳野離宮
七月　車駕還宮

と持統帝が最も多く、どの行幸の従駕か判然としない。作家の生歿年次の明瞭なものをとって勘案すれば、

史六五九―七二〇　男人六八二―七三八　万里六九五―七三七（広成―七三九）史は七世紀作詩も可能であるが、他の二人は八世紀に入っての作詩とする外はない。万葉に柘媛歌を一首もつ若宮年魚麻呂の文芸活動も七二〇～七三〇年代にかけてであった。つまり早くは七世紀末、遅くも八世紀初頭において、柘枝伝はすでに懐風藻の作家圏に愛読され親しまれていたというところ迄は結論可能である。さて、続日本後紀、嘉祥二年、正月の条に興福寺大法師等が天皇宝算四十に満つるを賀して、聖像丗軀を奉造し、金剛寿命陀羅尼経四巻を写し、四万八千巻を転読し、「竟更作下天人不拾芥。天女罷払石、翻擎ニ御薬一。倶来祗候。及浦島子暫昇ニ雲漢一。而得ニ長生一。吉野女眇通ニ上天一而　且去等像上」ってこれに長歌を副えて奉献したと記し、長歌の歌詞を載せているが、

日本乃野馬台能国遠……何志帝之御世。万代爾重弖飾弖奉レ令レ栄度。柘之枝乃由求礼婆。仏許曾。願成志多倍。聖而已。験波伊万世。……故事爾云語来留。澄江能。淵爾釣世志。皇之民。浦島子加。天女。釣良来弖。紫雲泛引弖片時爾。将弖飛往天。是曽此乃。常世之門度。語良比弖。七日経志加良。無レ限久。命有志波。此島爾許曽。有介良志。三吉野爾。有志能志示。天女。来通弖。其後波。蒙レ譴天。毗礼衣。着弖飛爾支度云。是亦。此之島根乃。人爾許曽。有岐度云那曽。云礼。

と浦島子柘枝を並列する場合、浦島子を先行させているが、これがもし浦島子伝の述作が柘枝伝に先行する故であると仮定すれば、馬養歿年（七〇二）前の作である浦島子伝以後、八世紀初頭あたりに、柘枝伝の成立は位置するものではあるまいか。早くとも七世紀末、伊豫部馬養が水江浦島子伝を記すという伝奇的機運が本朝でも勃興しだした頃、遅くとも八世紀初頭に位置するものと見るべきであろう。

さて、遅くとも八世紀初頭には、後述する様な、美稲と柘媛とを

中心人物とする柘枝伝が現存していた。「見二柘枝伝一」て漢文芸作家圏がことにもてはやし、吉野を題材に作詩する場合、柘枝伝を詠じこむ風が流行したのである。即ち、懐風藻の場合を見ると、従駕吉野、遊吉野等の題詩を有する詩は十四首を数えるが、その中前掲六首は明確に柘枝伝を契機とし、他の三首もこれに準じて考えられ、計九首及び二首が少なくとも神仙を契機として吉野の詩想を創りあげているのである。即ち、十四対十一という比率を見ると、懐風藻の詩人圏、即ち八世紀初頭の漢文芸作家圏にとって、吉野は伝奇的な景として造形されていたといわざるを得ない。吉野の伝奇的景とはどの様なものであったか。それは懐風藻の作詩全般にわたってみられる引用諸文献から考えられるところの彼等の教養を培った詩経、書経、易経、礼記、史記、穆天子伝、列子、楚辞、老子、荘子、陶淵明集、列仙伝、晋書、文選、淮南子、左伝、漢武故事等々大陸の先行文芸、就中、老荘、列仙伝、漢武故事、穆天子伝等神仙系の影響はもとよりであるが、直接的な影響は、六首乃至九首がもの語る柘枝伝の存在であるといわねばならない。上掲六首、万葉柘媛歌、興福寺大法師長歌等より柘枝伝を推定すれば、凡そ

一、場所　吉野川

二、人物　男―人間の男子美稲（熊志禰）が吉野川で梁を設け魚をつっていた。

事件　女―柘枝が流れて美稲の梁にかゝり仙女となり、地上の縁を生じた。（他の七仙女は鶴に乗じて去り、一人残った）

三、結末　譴を蒙った柘媛熊志祢（美稲）二人は逃げ、遂に、山野によじのぼって柘媛（二人）は毗礼衣をきて飛び去った。

仏聖が何事か、恐らく二人の幸福な結びつきの願を助ける行為をした。（万葉三八五歌を柘枝伝の歌と誤認した或説の存在よりすれば同趣向の歌従って「あられふるきしみがたけ」山に二人がよじのぼる事を余儀なくされる苦しみ――という筋があったとおもわれる）

右の様な白鳥処女説話系の伝奇であったらしく想われる。

さて、此処で考うべき事は、懐風藻の吉野詠藻十四首中十一首が柘媛乃至神仙を背景にもつものであった。ところが同時代の万葉集の吉野詠歌を調査してみると、全く異った結果が見出される事である。吉野詠歌は従駕吉野宮をはじめ約六十六首であるが、この中柘媛乃至神仙を作歌の契機としたものは一首も存在しない。たとえば

三一三　見吉野之　滝乃白浪　雖不知　語之告者　古所念

土理宜令

カタリシツゲバイニシヘオモホユといっても柘媛に関して六十六首は一切ふれないのであって、カタリツイだイニシへの内容は古来行幸の盛事であるらしく、暮春之月幸二芳野離宮一中納言大伴卿奉レ勅歌にも

三一五　見吉野之　芳野宮者　山可良志　貴有師　水可良思

清有師　天地与　長久　万代爾不改将有　行幸之宮

と讃するのみで全くもって柘媛に無縁である。万葉歌人にして漢文芸作家でもあった旅人、憶良、虫麻呂、福麻呂、家持等が、巻五、巻九、巻十六において「〇〇児」「〇〇処女」なる「娘子物」とも

いうべき詩文、歌をもってそれ等の巻を特色づけている事は周知に属している。

A　梧桐日本琴……夢化娘子　旅人　巻五
B　松浦川玉島之潭　（欠補仙媛）　旅人　巻五
C　松浦佐用嬪面　憶良
D　桜児　巻十六
E　鬘児
F　九人娘子と竹取翁　〃
G　娘子の話七種　〃
H　前采女（風流娘子）と葛城王　〃
I　上総末珠名娘子　〃　巻九
J　葦屋処女（蒐名日処女）　福麿　〃
K　勝鹿真間娘子（真間乃手児奈）　虫麿　〃
L　葦屋蒐原処女（蒐負処女）　虫麿　〃
M　蒼鷹を放ち夢裏に有娘子喩曰　家持　巻十七

○水江浦島子　巻九

右の「娘子物」は漢文芸作家の伝奇趣味による仮作――ABM――と、当時人口に膾炙していた「由縁」ある伝承――CDEFGHIJKL――に関心を惹かれそれを素材としたものとが存するのであるが、何れも、万葉歌人も亦懐風藻の漢文芸作家と同じく、娘子物のもつ伝奇性に惹かれて歌作した、この傾向が、五、九、十六の三巻にまたがるかなりの部分を占めるものであった事を注目しようと思う。旅人の如きは極めてありふれた素材をもって娘子仙媛を点出し来ってその詩文、歌に伝奇的雰囲気を造形しあげたのであった。

ところがその三巻の中に、柘枝伝説が全くふれられていないということは一体何を意味するのであろうか。万葉集に存する柘枝伝関係歌は上掲仙柘枝歌三首（巻三）であるが、三八五番の歌は

(1)「霞ふるキシミガタケをさかしみと云々であって吉野ならぬキシミ岳の歌である。

(2)左註に右一首或云。吉野人味稲与二柘枝仙媛一歌也。但見柘枝伝無有此歌、つまり、柘枝伝とは無縁の歌である。

吉野の柘枝伝とは関係がないのである。他の二首、三八六の作者は作者不明、三八七は若宮年魚麻呂の作である。何れも柘之枝が梁にかかったという柘枝伝を背景にもっての作であるが、二首とも「吉野」の景観に接し柘枝媛を憶ったとか、遊吉野川とかの題詩もなく、歌の内部においても「吉野」との関聯がないのである。つまり、仙柘枝三首は、万葉の表記に関する限り、吉野との結びつきが甚だ弱いという外はないのである。三八六、三八七両歌の作者は吉野において、柘枝媛を想起してこの歌を詠んだものと言うより、所謂、柘枝伝を読んで「後人追和歌」の様式に倣って、たとえば「続浦島子伝」、万葉集では梅花宴、松浦川の序、歌、において後人追和之詩三首帥老、和二松浦仙媛歌一首、松浦佐用嬪面の歌における後人追和、最後人追和、最最後人追和二首、三島王後追和松浦佐用嬪面歌一首等々、当時の一流行と想われるところの何か有二由縁一歌、詩文、伝奇に追和して詩、和歌を詠ずるという当時の文芸人にとって手なれた作歌態度においてなされたものと見るべきではあるまいか。柘枝伝に無レ有二此歌一という註記、及び仙柘枝歌三首という題詞は柘枝伝に和歌が存在していた事実をもの語るものの様である。

即ち、此歌はないが他の歌はあるというのではあるまいか。又、柘枝伝に歌があったからこそ、三首を仙柘枝歌三首の題詞下に一括したものであって、歌が存在しなかったらこの勘違いは生じなかったのではあるまいか。正しくは二首は詠仙柘枝歌乃至は追和仙柘枝歌とあるべきところであろう。三首における吉野との関りの薄さ、柘枝伝に存したであろう歌が万葉集に一首も伝わらぬこと、これも亦、万葉集が伝説、殊に「娘子物」に関心を寄せているにも拘らず仙柘枝関係歌を有しない事、吉野の詠歌六十六首中一首も柘媛にふれない事の不自然さに通ずるものであって、それは当然解明を要求される事項である。

さて次に柘の文字について考えてみよう。万葉集の用字において、柘の文字は、巻三上掲三首の題詞、左記、歌に使用されるのみで他に用例は全く存在しない。古事記中、柘の字は全くない。日本書紀武烈紀に海柘榴市の一例が存するが、敏達紀では同地名が海石榴市であり、ツバキが天武紀では白海石榴（シラツバキ）である。和名抄椿の部、海石榴、所引の漢語抄も海石榴である。本来、海石榴であったものが武烈紀の場合下字の木篇にひかれて木篇を附し、たま〳〵柘と記したものかとおもわれる。風土記にあるのは、出雲風土記九郡中、神戸郡、仁田郡、飯石郡三郡の郡内山野所生草木中に柘がある。現存風土記のツバイチ、ツバキは殆ど、海石榴市、椿で海柘榴は出雲風土記嶋根郡一例のみである。しかも里、海辺には「桑麻豊富」（嶋根郡、神戸郡等々）とあり、桑麻は栽培されていたかと思われるのである。植物の柘を調べてみると、和名抄には、桑柘 礼記注云、桑柘一荘射二音 和名久波一名都美 蚕所食也 月令孝春之月無レ伐二桑柘一

柘 毛詩注云桑柘音射漢語抄云一豆美蚕レ食也

と注している。日本国現在書目録、医方家には左記の本草関係書をあげている。その中○印は隋志にその名が見えるようであるから七、八世紀に将来されていたかともおもわれる。

新修本草二十巻（孔志約撰）。神農本艸七巻（陶隠居撰）
。本艸図廿七巻 。本草音義三巻（甄立言撰 仝一巻殷子厳撰）
食療本艸三巻（孟洗撰）

何れも現存しないが、その系統にある本草綱目をその所注に屢々援引し、他方柘と人間生活とのかゝわりを示す熟語をあげている辞海によって、中国において柘が人間生活にどういうかゝわりをもつのであったかを一覧してみよう。

因に私は仮定をもっている。わが上代、植物分類学の未しかった時期に、出雲国の官吏らが、果して山野所生の草木としてかゝげた山斂、桔梗、藍漆、龍胆、商陸、続断、独活、白芷、秦椒、柘、檢、蘗、楮、椿、赤桐、白桐、椿、槐……の凡てを辨別しえていたであろうか、という事である。漢籍のたとえば本草類の「丸写し」的な処置がとられる事はなかったろうか、という事であるが。

柘 至夜切、鴣韻、

明 李時珍本草綱目「処処山中有之喜叢生。幹疎而直。葉豊而厚。団而有尖。其葉飼蚕。其実状如桑子而円如椒。其木染黄赤色。謂之柘黄。」

柘弓

桑柘材勁宜作弓庾信春賦「金鞍始被柘弓新張。」

柘岡、柘林、柘城、柘皐という地名がある。

柘袍は

「黄柘汁可以染黄。故云王逢詩「三軍城上柘袍黄」

柘黄

以柘木染成之色成本草綱目「其木染黄赤色謂之柘黄天子所服」

柘弾

柘木所為之弾弓…何遜詩「柘弾随珠丸白馬黄金勒」

柘漿

黄汁也漢書礼楽志「泰尊柘漿析朝酲応劭注」「柘漿取甘柘汁以為飲也」

柘子引

唐教坊曲名楽府雑録「健舞曲」楽苑「羽調曲」詞譜云「按此舞因曲為名、用二女童、帽施金鈴、抃転有声、其来也、蔵二蓮花中、花坼而後見、対舞相占、実舞中雅妙者也、又按宋史楽志、「小児舞隊有柘枝」又沈括筆談「柘枝旧曲遍数極多、今已不伝」又詞牌名

柘シャという植物は、中国においては山によく自生する木であり、葉は蚕を飼うべく、柘汁は黄赤色の染料、飲料ともなり、材質勁く弓、弾弓を作り得る。柘枝舞なる舞曲までもてはやされた。従って、人間生活にいたってなじみ深くそれを含む地名もある。まことに重宝な、生活に密接した木であったのである。ところが本朝においては、人間生活に殆ど馴染のない木である。殊に七、八世紀の日本人の生活史には出てこないのである。

柘が出てこないのに対して、桑は実に頻繁に出てくる。万葉集、記、紀、風土記にあっては、桑は養蚕業と共に民生に緊密なかかわりを持ってきた。即ち、桑原、桑名という地名、桑梓をもって「もとつくに」と訓じ、農桑とかいて「なりはひ」とよむにいたっている。

日本書紀には、柘枝ならぬ桑の枝が流れてくる条がある。

紀

仁徳天皇三十年十一月甲寅朔庚申、天皇浮レ江幸二山背一。時桑枝沿レ水而流之。天皇視二桑枝一歌之曰。

蒐怒瑳破赴。以破能譬謎餓。飫朋呂伽珥枳許瑳怒。干羅愚破能紀。予屢麻志士枳。箇破能区莘愚莘。予呂朋譬喩玖伽茂。干羅愚破能紀。

全く、柘枝伝――柘の小枝が流れてきて女となる――と無関係である。八世紀撰進の日本書紀撰者等は果して柘枝仙媛伝説なるものを知っていたであろうか。何故に上代日本人の習熟せる桑枝ではなく、記、紀（上述の理由で特例を除く）、万葉集（柘枝伝関係三首をのぞく）に用いない柘、柘枝伝でなければならなかったか、これも解明を要するところである。

次には、万葉集において柘枝仙媛歌は吉野と無関係であったが、記、紀において話柄の片鱗をも留めないのみか、記紀の吉野とも亦全く無縁である事、即ち上掲の如き、度々の吉野行幸にも、これをかけて言った者がなく、記、紀における吉野の景観とも無縁である事も亦、不自然であろう。

以上は、柘枝伝が、吉野川に生れた柘枝伝説である、乃至はそれ

を素材として或る作家が綴った伝奇であると仮定する際に生じた不自然な諸条件なのである。従って、今この仮定をすてて、それにかえるに柘枝伝は、漢文芸作家によって新しく創作された伝奇であり、柘枝伝説なるものは、実は日本には存在しなかった、との新しい仮定をもってすれば、事態は一変する。即ち、柘枝伝説が無かったとすれば、度々の吉野遊山にも、万葉集、記、紀共に柘枝伝説にふれないのは当然である。

では、漢文芸作家は、何を契機として、柘枝伝なるものを創作したか。

ここにおいて、遣唐使臣、留学生、留学僧が大陸において見聞し、それを又語り伝えたであろうために、殊に漢文芸作家圏にとっては熟知の大陸の柘枝舞、が当然考慮されなければならない。柘枝伝に柘枝舞の関連を暗示されたのは川口久雄氏「平安朝漢文学史」である。

柘枝舞は、唐の高名な舞曲であり、健舞にぞくする。唐代詩人が詩によみ、韋応物の女はその妓になっていたと伝えられるところの代表的舞曲である。

劉禹錫の観柘枝舞二首及び楽府柘枝詞を左に掲げよう。

胡服何葳蕤。　僊僊一作蹉登綺墀。　神飆猟紅蕖。
龍燭映一作然金枝。　垂帶覆纖腰。　安鈿当嫵眉。
翹袖中繁鼓。　傾眸遡樓華。　燕奏有旧曲。
淮南多冶詞。　欲見傾城処。　君看赴節時。

山雞臨清鏡。　石燕赴遙津。　何如上客会。
長袖入華裀。　体軽似無骨。　観者皆聳神。

曲尽回身処一作去。層波猶注人。　（全唐詩）三五四

楽府五十六色舞曲歌辞

柘枝詞

楽府雑録曰。健舞曲有柘枝。歌舞曲有屈柘。楽苑曰。羽調有柘枝曲。商調有屈柘枝。此舞因曲為名。用二女童帽施金鈴抃一作抃転有声。其来也。於二蓮花中蔵。花拆而後見。対舞相占。実舞中雅妙者也。教坊記曰凡棚車上擊鼓非柘枝則阿遼破也。羯鼓録曰。凡曲有意尽声。不尽者須以他曲解之如耶婆色雞用屈拓急遍解屈柘用渾脱解之類是也一説曰柘枝本拓枝舞也其後字訛為柘枝沈亜之賦云管神祖之克戎賓雜舞以混会柘枝信其多妍命佳人以継態然則似是戎夷之舞按今舞人衣冠類蛮服疑出南蛮諸国者也

将軍奉命即須行塞外領彊兵聞道烽燧動腰間宝劍匣中鳴

同前三首　　辭能

同営三十万震鼓伐西羌戦血黏秋草征塵攪夕陽帰来人不識帝里独戎装
懸軍征拓羯内地隔粛関日色崑崙上風声朔漠間何当千万騎颯颯弐師還
意気成功日春風起絮天楼台新邸第歌舞小嬋娟急破催摇曳羅衫半脱肩

屈柘詞　　温庭筠

揚柳紫橋緑玫瑰払地紅繡衫金驟鳳花髻玉瓏璁宿雨香潛潤春流水暗通
画楼初夢断晴一作晩日照湘風

即ち、胡服をつけ、激しく華やかな動作であったらしい。大唐六典の武舞の部をみれば、十部の伎として

第一燕楽伎　第二清楽伎　第三西涼伎　第四天竺伎
第五高麗伎　第六亀慈伎　第七安国伎　第八疎勒伎

第九高昌伎　第十康国伎

とあげている如く隋唐の音楽は全く西域楽をもって風靡されたとは屢々説かれるところである。その中、柘枝舞は胡騰舞と共に現在のタシケント地方に源を有する健舞であるといわれている。胡服緩帽の二童女が蓮華中にかくれており、花が開くと両方から出てきて、銀鈴にあわせて舞う華麗な健舞である。

今少しく柘枝舞に関する文献中、要をえた二考説を繙いて、その唐舞曲中での位相、着用の衣服、採物を一瞥しようと思う。

○唐戯弄　任半塘撰

第五章伎芸四舞蹈

査郭茂倩楽府詩集五六引崔記之語曰

垂手羅、回波楽、○蘭陵王、○春鶯囀　半社渠

借席、烏夜啼之属、謂之『軟舞』。阿遼　柘枝。○黄麞、払林、大渭州、達摩之属、謂之

『健舞』。凡棚車上擊鼓、非柘枝、即阿遼破也

(○)柘枝与阿遼破、既居健舞之首。而鼓架之入柵車者必奏柘枝或阿遼破、則鼓架部諸戯内多用健舞明矣。段録『集工』条曰

健舞曲有稜大、阿連、柘枝、剣器、胡旋、胡騰。軟舞曲有涼州、緑腰、蘇合香、屈柘、団円施、甘州等。

第六章　一劇場

唐代長安地方之娯楽場所、頗有歌場、変場、道場、戯場四種可挙。請先明前三種之輪廓、然後再詳第四種戯場、庶可顧及全面

敦煌曲皇帝感辞第一首曰

新歌旧曲遍州郷、未聞典籍入歌場。新合孝経皇帝感、聊談聖徳奉賢良！

此処『歌場』二字、無論虚指或実指、皆示開天間、玄宗親注孝経頒行天下之時、民間原有之聴歌場所、業已遍及州郷、正好藉以推行此項皇帝感詞、為宣伝之助。名雖曰『歌場』、唐代歌与舞多不分離、其実必兼為舞場也。如韋応物之女、曽流落長沙舞柘枝為活、或即託跡於此種歌場。

二服飾

柘枝舞於帽、於衫、於帶、於靴、均着意経営。……宣宗時、播皇猷曲之舞者、高冠方履、褒衣博帶、余亦衣洙翠緹繡。但詳唐大曲。而剣器舞之初期独舞及柘枝舞、孫武順聖楽舞三者、同以女伎作雄装、盧肇柘枝舞賦所謂『非妹喜之牝雞、匪木蘭之雄兎』已類乎後世戯中之扮演矣。

○夢溪筆談沈括撰校証

柘枝(一)旧曲遍数極多、如羯鼓録所謂『渾脱解』之類、今無復此遍寇莱公(二)好柘枝舞(三)至(五)会客必舞柘枝、毎舞必尽日時謂之『柘枝顚』今鳳翔有一老尼　猶是莱公時柘枝妓云『当時柘枝尚有数十遍　今日所舞柘伎、比当時十不得二三。』老尼尚能歌其曲、好事者往往伝之

これに関連して、本朝に伝来した当時の伎楽をも一瞥しておこう。

推古紀廿年百済人味摩之が帰化したので朝廷は、彼を桜井に住ましめ、その呉に学び得たという伎楽舞を、「少年」を集めて習わしめた。今日、正倉院に秘蔵されている伎楽面をみると、崑崙面、婆羅門面、酔胡王、酔胡従面は何れも名称、顔貌、共に古代オリエント

系を想わせるものであり、これをつけて天竺抹邑国の楽と伝う菩薩、迦陵頻、胡飲酒、安摩、倍臚、抃頭、散手破陣楽、蘇合香、万秋楽、蘇莫者、獅子、等の舞曲を舞ったものである。又、紀の天平三年、雅楽寮の定員を定めたが、大唐楽三十九人、百済楽二十六人、高麗楽八人、新羅楽四人云々、の殆んどは帰化人の子弟がこれにあずかった。その唐楽中、春鶯囀、蘭陵王は前掲軟舞に、黄鬣は健舞に属するわけである。伝来舞曲中に柘枝舞を見出す事をえないが、前掲文献によって明らかな如く、柘枝舞は唐の代表的健舞（古代オリエント系）であったのである。本邦に伝来したその同類は、かく東大寺、唐招提寺をはじめ諸寺の会式に又朝廷の宴会、蕃客の接待に奏されたから当時の知識人官僚にとっては、耳なれた楽曲舞曲であったわけである。

この伎楽についての教養をもった遣唐使臣、留学生、留学僧、が唐土にあって柘枝舞に接する機会は必ずや一再にとどまらなかったであろう。殊に文章関係の留学生にとって、唐の詩人、知識人等を「聳神」させた柘枝舞は印象にのこったに相違ない。その上、唐の詩人らの伝奇創作熱、伝奇のおもしろさ、しかも伝奇の形式のもつ試作の容易さは才気ある彼等の創作意欲を煽らずにはやまなかったと思われる。静かにとじた蓮華がひらけば華中から男装胡服の二美少女が現出し、鈴にあわせて二人が「石燕赴遙津」、又骨なきが如く舞い狂う華麗さの印象が契機となって、白鳥処女説話系の伝奇を創作した、吉野川の清流に梁をかけて静かに待つ男、味（美）稲、流れてきた柘枝が、梁にかゝるや否や化して美少女となる。男と地上の縁を生じたが譴を蒙って二人は山野を逃げまわり遂に毗礼衣を きて飛び去るという如き、いわば舞曲風な伝奇が新しく創られたものであろうと思う。因に実は味稲、美稲、（熊志祢は訛伝とみる）ウマシネという命名自体も、或は中国舞曲の「末泥」とかかわりがあるのではないか。というのは美稲、味稲ウマシネ、熊志祢クマシネと末泥の音の類似である。末泥の字音をわが上代はマネに使用し、泥と祢は同音を表わすのに用いているからである。

西河詞話に「以男名末泥女名旦兒者并穉色人等入勾欄扮演随唱詞作挙止……」と言う立役末泥の原始形態が又、男末泥と女旦児との歌唱、舞踊の原型、が或は古く唐の民間の歌舞の中に胚胎していはしなかったか、それの影響をうけて味稲と仙女とを形成したか、という試案をもったが「末泥は北宋時代に出来た立役であって唐代には存在しない」という浜一衛氏の御教示によって、一応追求を打ちきり、後日にゆずる事とした。（一九六〇年六月稿）

○参考・「伊予部馬養作『水江浦島子伝』（仮称）考」—言語と文芸十一月号

——福岡女子大学教授——